

令和元年度中学校武道授業（なぎなた）指導法研究事業



なぎなた部員による側面打ち

令和元年度中学校武道授業（なぎなた）指導法研究事業（主催＝日本武道館・全日本なぎなた連盟・日本武道協議会、後援＝スポーツ庁、山形県教育委員会、山形市教育委員会）は10月11日、山形県山形市立第七中学校で研究者6名が出席して行われた。本事業は平成24年度から完全実施された中学校武道必修化の充実へ向け、なぎなたの特性を踏まえた指導計画、指導内容、指導法、評価などについて研究協議をするものである。

当初、11日～12日の2日間を予定していたが、台風19号の接近に伴う公共交通機関への影響により、11日のみの開催となった。

■開講式

はじめに、今浦千信全日本なぎなた連盟常務理事が挨拶に立ち「今回の視察では、指導書に基づいて、どのように評価をしていくのか、学びに向かう力について、検討していきます。子どもたちが安全に楽しく参加できるような授業づくりのために、有意義な時間を過ごしたいと思います」と述べた。

次に、中島昭博日本武道館振興課長が挨拶に立ち、「授業を通してなぎなたの素晴らしさ、魅力を全国の中学生に提供できるよう議論していただくとともに、先生方のお知恵を集めて生徒が主役の安全で、楽しく効果の上がる授業を研究していただきますよう、お願い申し上げます」と述べた。

続いて、高橋正博山形市立第七中学校校長が協力校を代表して挨拶をし、「ようこそ、山形にお越しいただきました。なぎなたの授業研究を進めていただきながら、本校の子どもたちの良さなども見ていただければと思います。意義のあるより良い研究事業になるよう、ご祈念申し上げ、挨拶とさせていただきます」と述べた。

開講式後、今浦研究者が授業を視察する上でのポイント等を確認。その後、体育館に移動した。なぎなたの授業が始まる前には、3年生による山形伝統の「花笠音頭」が披露され、なぎなた授業の声出しにつながった。

■授業視察

山形市立第七中学校では、1、2学年は柔

道を選択しており、3年生で初めてなぎなたを受講する。8時間授業のうちの4時間目であり、2クラス合同（男子生徒28名、女子生徒22名）の授業を視察した。

授業は日本武道協議会発行の指導書に沿って進められ、はじめに松井亮子研究者（同校教諭）が本時の目標「相手との間合を考えて打ったり受けたりしよう」を確認。前時までの復習として、正面打ち、側面打ち、すね打ちを練習。なぎなた部の生徒が円の中心で動きを見せながら、松井教諭がポイントを説明した。二段技、三段技にも取り組み、同じようになぎなた部の生徒が動きを見せた後、正面→側面、側面の三段技を練習。その後、4人グループを作り、打ち返しを確認しあった。

■研究者意見

○鈴木理香研究者

生徒の動きを見ていると、手の握りを変えるなどの思いがけないことをするが、松井教諭が手の内の説明時に使った「しゆるしゆる」という言葉が生徒に馴染み、初めての応じ技がスムーズにできていた。

○山本由加里研究者

生徒は先生が説明をする時以外はしっかりと動いており、運動量が確保されていた。また、なぎなた部員の生徒がアドバイスをして回るなど、約50名の生徒がいる中で、スムーズに授業が進行されていた。

○真部順子研究者

なぎなた部の活用について、評価をどうするのが難しいと感じた。技術面で判断しがちだが、周りの生徒に対して的確なアドバイスができているか、などの明確な判断基準が必要だと感じた。

○小椋かおり研究者

授業の展開は早いですが、生徒もしっかりとついてきており、技能が定着している。最後の感想を発表する際も、授業で出ていた言葉を使って話せていたのがよかった。

○松井亮子研究者

授業では、男子生徒が飽きないように、特に声かけをして目を向けている。なぎなた部員を活用しながら、安全面にも注意を払い、今回いただいた意見を活かしながら今後も取り組んでいきたい。

○今浦千信研究者

学びあう姿勢には、グループ学習も大事になる。生徒の気付きへのサポートができるよう、いくつかポイントを示せたらいいのではと感じた。

■閉講式

研究者を代表して今浦研究者が講評を、中島昭博日本武道館振興課長が研究者、協力中学校に対する謝辞を述べ、終了した。

